

学位論文題名

歌の記憶における詞と旋律の相互影響関係

学位論文内容の要旨

本研究は、歌が聴取され記憶される際に、その歌詞の言語的処理と旋律の音楽的処理がそれぞれ独立的に行われているのか、それとも相互的影響の下で行われているのかについて、実験的に検討したものである。本論文では、この問題に対し、大きく次の3種類の検討を行っている。一つ目は、歌の旋律(音楽)の二つの下位要素的側面であるリズム的側面と音高的側面それぞれと、歌の詞(言語)との影響関係を調べ、詞と旋律との間で認められているある種の記憶の促進効果が、詞と旋律のリズム的側面との間、また、詞と旋律の音高的側面との間にも認められるかどうかの検討である(第2章および第3章)。この検討は、言語と音楽との間に生じるとされている記憶の促進効果が、言語と音楽の下位要素側面との間のどのような影響関係を基盤にしているかを明らかにしようとする新しい試みといえる。二つ目は、詞への旋律の付加、および、旋律への詞の付加が、それぞれの記憶にどのような影響を与えるかについての検討である(第4章および第5章)。意外なことに、このそれぞれの記憶の効果についての実験的検討は、過去において十分に信頼おける形ではなされていないものである。三つ目は、詞の付加が旋律の識別にどの程度影響を与えるかという、より限定的な問題の検討である(第6章)。これは、歌における詞の処理と旋律の処理との間の影響関係について、特に詞から旋律への影響に注目した、補足的ではあるがより詳細な検討といえる。

本論文は、第1章「序論」、第2章・実験報告「歌の記憶における、旋律のリズム的側面および音高的側面と、歌詞との相互作用—再認課題の難易度が高い場合—」(実験1~3)、第3章・実験報告「歌の記憶における、旋律のリズム的側面および音高的側面と、歌詞との相互作用—再認課題の難易度が低い場合—」(実験4~6)、第4章・実験報告「歌の詞と旋律が互いの再認を促進する効果—有意味材料を用いた場合—」(実験7~8)、第5章・実験報告「歌の詞と旋律が互いの再認を促進する効果—無意味材料を用いた場合—」(実験9~10)、第6章・実験報告「歌の詞が旋律の識別を促進する効果」(実験11)、第7章第「結論」から構成されている。

第1章「序論」では、研究の背景と目的について述べている。歌の処理過程に関する近年の研究動向を、「1.2.2. 詞と旋律の独立性と相互作用性」、「1.2.3. 歌の表象構造」、「1.2.4. 歌の印象形成」、「1.2.5. 歌認知を説明するモデル」の各観点から紹介しつつ、本論文の扱う問題を提示している。すなわち、歌における詞(言語)の処理と旋律(音楽)の処理との影響関係について、両者が独立的であるかそうでないか、特に独立的でない場合にその相互影響関係が具体的にどのような性質をもつか、がまだ明らかにされていないこと、また、旋律の処理に含まれると指摘されているリズム的側面の処理と音高的側面の

処理との独立性についてと、そのそれぞれの歌の処理への寄与の程度についても議論が残されていること、を指摘している。

第2章においては、3つの実験（実験1～3）により、歌の記憶における旋律のリズムの側面および音高的側面と歌詞との相互作用を検討している。ここでは、歌は詞と旋律から成り、その旋律はさらにリズム的側面と音高的側面から成ることに注目し、これら旋律の要素的側面が、歌の詞と旋律の影響関係にどのように寄与するのかを明らかにしようと試みている。そして、その結果から、歌の記憶における詞と旋律との間に見られる非対称な影響関係（実験1）が、詞と旋律のリズムの側面との間の影響関係（実験2）、および、詞と旋律の音高的側面との間の影響関係（実験3）の両者に起因している可能性を指摘している。

続く第3章においても、第2章と同様に、歌の記憶における旋律のリズムの側面および音高的側面と歌詞との間の相互作用を検討している。ここで行われた実験4～6では、実験1～3と同じ実験的デザインがより改良された方法で用いられている。実験の結果からは、実験1～3と同様に、歌の記憶における詞と旋律との間に見られる非対称な影響関係（実験4）が、詞と旋律のリズムの側面との間の影響関係（実験5）、および、詞と旋律の音高的側面との間の影響関係（実験6）の両者に起因している、という考察が述べられている。

第4章の実験7および実験8では、歌の詞と旋律が互いの記憶を促進するという通説が本当に確実で一般性をもつものであるのかを、検討している。旋律の付加が詞の再認に影響するかどうか（実験7）、詞の付加が旋律の再認に影響するかどうか（実験8）を、有意味句を刺激材料として検討し、旋律の付加は詞の再認を促進するが、詞の付加はときには旋律の再認を妨害することもある、という結果を提出している。

続いて、第5章の実験9および10では、第4章と同様の問題を、無意味句を用いて検討している。ここでは、詞の付加が旋律の再認を促進する、という結果を提出している。その上で、両章（実験7～10）の結果をまとめ、旋律が詞の再認に与える影響よりも詞が旋律の再認に与える影響のほうが強い、という非対称性の存在を指摘している。

第6章では、実験11により、詞の処理が旋律の処理にどのように影響を与えるかを検討している。すなわち、詞が付随する場合と付随しない場合の旋律の識別のしやすさを比較検討している。そして、その結果から、旋律は、単なる旋律として呈示されるよりも、歌として呈示されるほうが識別されやすい、と結論づけている。

第7章「結論」においては、本論文に記された実験研究から得られた知見を次の二点に集約している。その一点目は、歌が処理されたり記憶されたりするとき、言語的処理と音楽的処理は、ある程度独立に行われるものの、相互に影響を与え合うという知見である。この点については、さらに、詞と旋律の間で非対称な促進効果として現れることが多いと結論づけている。その二点目は、詞と旋律との間で観察される相互的影響関係は、詞と旋律のリズムの側面との間、また、詞と旋律の音高的側面との間においても生じるという知見である。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 阿 部 純 一
副 査 准教授 安 達 真由美
副 査 教 授 金 子 勇

学 位 論 文 題 名

歌の記憶における詞と旋律の相互影響関係

本研究は、歌が聴取され記憶される際に、その歌詞の言語的処理と旋律の音楽的処理がそれぞれ独立的に行われているのか、それとも相互的影響の下で行われているのかについて、実験的に検討したものである。本論文では、この問題に対し、大きく次の3種類の検討を行っている。一つ目は、歌の旋律（音楽）の二つの下位要素の側面であるリズム的側面と音高的側面それぞれと、歌の詞（言語）との影響関係を調べ、詞と旋律との間で認められているある種の記憶の促進効果が、詞と旋律のリズム的側面との間、また、詞と旋律の音高的側面との間にも認められるかどうかの検討である（第2章および第3章）。この検討は、言語と音楽との間に生じるとされている記憶の促進効果が、言語と音楽の下位要素側面との間のどのような影響関係を基盤にしているかを明らかにしようとする新しい試みといえる。二つ目は、詞への旋律の付加、および、旋律への詞の付加が、それぞれの記憶にどのような影響を与えるかについての検討である（第4章および第5章）。意外なことに、このそれぞれの記憶の効果についての実験的検討は、過去において十分に信頼おける形ではなされていないものである。三つ目は、詞の付加が旋律の識別にどの程度影響を与えるかという、より限定的な問題の検討である（第6章）。これは、歌における詞の処理と旋律の処理との間の影響関係について、特に詞から旋律への影響に注目した、補足的ではあるがより詳細な検討といえる。

本論文の成果の第一は、歌の言語的処理と音楽的処理が相互にその記憶に影響を与えることを、より詳細に、かつ、より明確に、確認した点にある。従来、通説的に知られていた記憶現象を対象として、より厳密な実験的吟味を通してその実態の一端を明らかにした点に、本論文の当該領域における学術的貢献を認めることができる。本論文の成果の第二は、これまでに指摘されてきた詞と旋律との間の非対称的影響関係が、詞と旋律のリズム的側面との間、また、詞と旋律の音高的側面との間においても生じることを、初めて明らかにした点にある。この点にも、本論文の学術的貢献を認めることができる。

本論文は、歌の記憶における詞と旋律の相互影響関係の様相を明らかにしようとしたものである。その成果は、上述したように、当該研究領域において未解決あるいは未確認であった問題に一定の見解を提供したという点で学術的貢献をなすといえる。また、本論文の成果は、記憶、音楽、言語などに関係する認知心理学や認知神経科学に幅広い示唆を与え

る学術的価値をもつといえる。これらのことは、本論文中に記されている研究成果が、我が国の基礎心理学領域を代表する査読付き学会誌や当該研究領域を代表する国際会議論文集などに複数編掲載されていることから確認できる。

以上により、本委員会は本論文の著者中田智子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。